

NPOカタリバ

NPOカタリバ

認定特定非営利活動法人 カタリバ

〒166-0003 東京都杉並区高円寺南 3-66-3 高円寺commons 2F

Tel: 03-5327-5667 Fax: 020-4665-3239

<https://www.katariba.or.jp/>

カタリバは、その運営組織及び事業活動が適正であること等、一定の要件を満たすものとして、東京都から認定NPO法人に認定されています。

2017年3月発行

NPOカタリバ

# NOTE BOOK



どんな環境に生まれ育っても  
「未来は創り出せる」と信じられる社会へ

認定特定非営利活動法人カタリバ

豊かな環境で生まれ育つ人がいる。  
 不利な環境で生まれ育つ人もいる。  
 都会で生まれる人もいれば、  
 地方で生まれる人もいる。  
 震災が起きた時に、  
 被災地にいる人もいれば、  
 テレビで様子を見守る人もいる。



豊かな環境で生まれても、  
 自分が嫌いだという人もいるし、  
 経済的に貧しくても、  
 心豊かに幸せに生きる人もいる。  
 その環境の良し悪しは、  
 人によって捉え方が違う。  
 大切なのは、  
 そこにいることを受け入れながら、  
 意味を見つけられること。



タテの関係は大切だ。  
 ヨコの関係はもっと大切だ。  
 しかし悩める10代には、それだけでは足りない。  
 思春期の子どもたちの内発性を引き出す  
 ナナメの関係をこの世の中に取り戻していきたい。



# 未来は、 つくれる

18歳選挙権のスタートや、2020年の大学入試改革など、日本の10代をめぐる環境は大きく変わろうとしています。

いわずもがなやってくる人工知能と共存する社会や、少子高齢化が進む人口減少社会…。予測不可能な変化の激しい社会にあって、子どもたち一人ひとりが幸福な人生を生きるためには、どのような資質・能力を育成していくべきか。

2016年11月で設立から15周年を迎えたカタリバも、これまでに私たちが届けてきた価値を見直し、再定義する時期が来ていると考えています。

そもそも、これからやってくる未来は誰も生きたことがありません。誰も見たことのない社会を歩こうとしているのに、従来の慣例主義やルールで導くことは、想像するだけでも困難です。

大人は経験値がある分、子どもたちが遭遇するであろうリスクに対しても、ある程度予見することができるので、自らの知見・経験で子どもたちを導きます。まわりの大人のおせっかいは、とても大切なセーフティーネットになり得ます。とくに「タテの関係」にある親や学校の先生方の存在は、偉大です。彼らの無条件な愛情や寄り添いがなければ、子どもたちは人生に必要な土台の部分を育むことができないからです。

しかし、自分たちの力でいよいよ立ちたくなっている思春期の子どもたちにとって、その導きは時に反発を生みます。親にこそ知られたい隠し事が増えてくるのもこの頃であり、タテの関係のアプローチは届きにくくなるものです。それこそが思春期の特性とも言えます。

この時期のこうした「わかりあえなさ」を前提に、子どもが自ら選択できない「タテ」の関係を担う方々に教育責任を丸投げするのではなく、「意欲に火を灯す」役割を社会で分担していけないか。つらい時につらいと打ち明けられる人の存在が近くにいたら、その悩みを「大したことじゃなかった」と、捉え直せる機会にならないか。

カタリバは、創業以来「ナナメの関係」と「本音の対話」を軸に、子どもたちが主体的に人生を切り拓く学びを届けてきました。

タテの関係では押し付けになることが、少年上の先輩（ナナメの関係）からのアプローチでは「意欲に火を灯す」。これは、カタリバが15年間、高校生に動機付けを行う授業「カタリ場」でも、東北・熊本をはじめとして全国に広がる「第3の居場所」でも、一貫して提供してきた価値です。

日本の10代が元気になることは、元気な日本の未来をつくること。

どんな環境に生まれ育っても、「未来は創り出せる」と信じられる社会を目指し、これからもカタリバはすべての10代にナナメの関係をつなぐ活動に全力をあげていきます。



日本の10代が元気になることは、  
元気な日本の未来をつくること

代表理事 今村 久美



高校生の心に  
灯を灯す授業  
「カタリ場」を構想

カタリバの設立は 2001 年。当時大学生だった今村久美（代表理事）と三箇山優花（共同創業者）の二人が、「たまたま出会った環境や、受けられた教育によって、描き出せる未来のイメージさえも違ってしまふこと」に疑問を抱いたのが、創業のきっかけでした。

当初はなかなか学校で受け入れてもらえなかった「カタリ場」の授業も、スタッフの熱意と先生方の口コミで、首都圏の公立高校を中心に広まっていきました。2006 年には NPO 法人化。ボランティアや寄付者、企業・行政などさまざまな方から応援いただき、年間 30,000 人以上の高校生に授業を届けられるようになりました。

2001~



被災地で生まれた  
プロジェクト型学習  
「マイプロジェクト」  
事業を拡大、全国に展開

被災地のコラボ・スクールで学ぶ中で、「町の復興のために、自分たちも何かしたい」「支援される側を卒業して、自分たちが地域や社会をつくっていく人になりたい」といった想いを抱く生徒たちが出てきました。震災後の地域の課題を解決するために立ち上がった高校生が、行動しながら考える力やチームワークを培う、プロジェクト型学習のサポートを行うようになりました。

社会参加意欲を持った高校生がいるのは被災地だけではありません。そうした高校生たちが地域や自分自身の課題を見つけて解決に向けて行動していく流れを全国に広げていこうと、2013 年から「全国高校生マイプロジェクト」を開始しました。

2013~



教育から地域の魅力化・活性化を  
島根県雲南市「おんせんキャンパス」  
スタート

過疎化が進み人口減少が止まらない島根県雲南市にて、教育から地域の魅力化・活性化を応援する「おんせんキャンパス」が始まりました。地域と子どもたちの関わりを増やしていくことで、地域の課題を「自分ごと」として捉え、未来を牽引していく人材の輩出を目指しています。カタリバが雲南市教育委員会からの委託を受け、キャリア教育事業と不登校支援事業を行っています。

2015~



2016.4.14・16  
熊本地震



2016~



困難を乗り越え、  
自立する力を  
子どもたちに  
東京都足立区で  
「アダチベース」開設

日本の子どもの 6 人に 1 人が貧困状態にあると言われています。カタリバもこれまでの中高生との関わりの中で、家庭環境などに困難を抱える例を見聞きしていました。そんな状況を変えていきたいと考えていたカタリバが、子どもの貧困対策に力を入れている東京都足立区からの委託を受けて、困難な家庭環境の中で育つ中学生を対象とした居場所事業「アダチベース」の運営を行うことになりました。

2016~



東北の経験を熊本へ  
熊本県益城町でも  
「コラボ・スクール」  
を開校

2016 年 4 月の熊本地震で特に被害の大きかった熊本県益城町で、震災直後から支援を行い、6 月にはコラボ・スクール「ましき夢創塾（むそうじゅく）」を開始しました。東北での経験からカタリバが学んだのは、震災で傷つき、長期化する仮設住宅での生活を余儀なくされる子どもたちは、細やかに見守り、根気強く支える必要があるということです。東北から受け取ったバトンが益城町につながっています。

2015~



いつでも、なんでも  
挑戦できる  
中高生の秘密基地  
東京都文京区に  
「b-lab」が開設

都市部の中高生は、受験などさまざまな理由で地域との接点が薄くなります。地域と生徒が断絶されてしまう、そんな状況に強い危機感を抱いていた東京都文京区と、「被災地以外でも子どもの日常を継続的にサポートできる居場所をつくりたい」と考えていたカタリ場が出会い、中高生の居場所「b-lab（ビーラボ）」が生まれました。

2011~



東日本大震災を  
きっかけに  
「コラボ・スクール」  
を設立

2011 年、東日本大震災の被災地である東北の 2 カ所で、放課後学校「コラボ・スクール」を設立しました。宮城県女川町の「女川向学館」と、岩手県大槌町の「大槌臨学舎」です。当初は現地のニーズに応え、子どもたちへの学習支援と心のケアに注力。教室が軌道に乗るうちに、カタリ場で培ったノウハウを活かし、未来の復興を担うリーダーの育成に取り組みようになりました。

これまでのカタリ場は、いわば子どもたちにとっての「非日常」的な教育活動であったわけですが、このコラボ・スクールでは初めて、子どもたちの「日常」に寄り添うこととなりました。その経験がまた、新たな事業へのきっかけとなりました。

HISTORY

2011.3.11  
東日本大震災

## カタリバ これまでの軌跡

カタリバは「ナナメの関係」と「本音の対話」を軸に、どんな環境に生まれ育っても「未来は創り出せる」と信じられる社会を目指して、活動を続けてきました。設立当初から続けてきたカタリ場事業、震災をきっかけとして始まったコラボ・スクール、そしてマイプロジェクト。そこからさらに、都市部と地方のそれぞれの課題や、子どもの貧困問題など、社会の変化に応じて新たな事業に取り組んでいます。



カタリ場



## 動機付けキャリア学習プログラム 「カタリ場」

「カタリ場」は、主に高校生の進路意欲を高めるために行われるキャリア学習プログラムです。大学生・専門学校生などのボランティア・スタッフが高校に出張して、高校生一人ひとりと対話しながら、将来を考えるきっかけを届けます。

### 「自分はダメな人間だと思ふことがある」72.5%

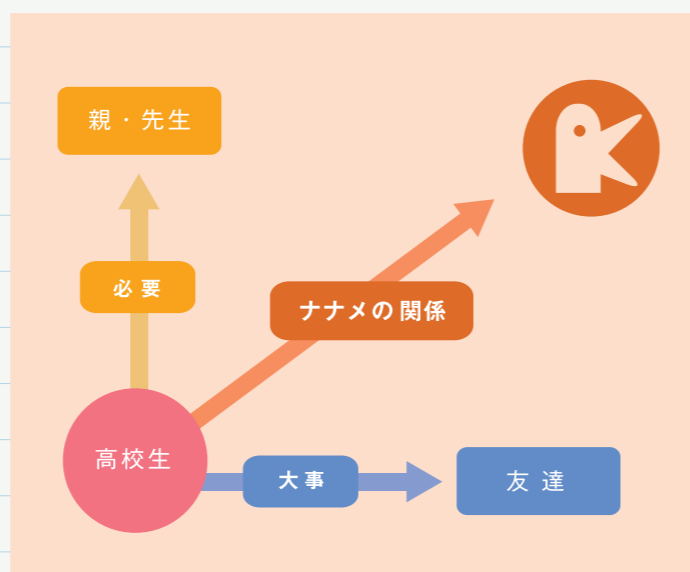
「自分はダメな人間だと思ふことがある」72.5%、「将来に不安を感じている」71%。高校生へのアンケート\*から分かるのは、自己肯定感の低さです。

ほとんどの高校生には、大学生や社会人と接したり、将来についてリアルティをもって考える機会がありません。高校時代に「こんな大人になりたい」という憧れや、目標へと背中を押してくれるきっかけさえあれば、自分に自信を持ち、より主体的な生き方や意志ある進路選びができるようになるのではないかと。そんな思いから始まったのが、「カタリ場」の授業です。

\*「高校生の生活と意識に関する調査報告書」国立青少年教育振興機構 2015年8月より



### 大学生ボランティアなどの先輩との「ナナメの関係」



カタリ場プログラムでは、大学生・専門学校生などのボランティア・スタッフが高校生から「興味のある分野」や「進路についての悩み」の話を引き出し、スタッフは自身の「大学生活で熱中していること」や「高校の頃の失敗談」を語りかけます。

高校生が本音を話してくれる鍵は、親や先生（タテ）でもない、友達（ヨコ）でもない、「ナナメの関係」。「少し年上の先輩」との出会いによる憧れや安心が、彼らの心に火を灯します。授業の最後には、高校生一人ひとりが「今日からできる小さな行動」を宣言し、高校生活を自ら変えていくきっかけをつかむのです。

### 教室に“対話”を届ける授業

カタリ場プログラムは通常、1学年200～300人の高校生に対し、数十名の「キャスト」と呼ばれるボランティア・スタッフが出張して、班ごとに分かれて進められます。1回の授業は100～150分間、3つのパートで構成されています。

#### カタリ場の流れ

##### 1 座談会（自分を理解する）

キャストが高校生に「興味のあること」や「進路についての悩み」など質問していくことで、高校生が好きなこと、嫌いなことを言語化するとともに、未来の夢や漠然とした不安などを引き出していきます。高校生が安心して本音を話せる場をつくり、自己理解を促します。

##### 2 先輩の話（ロールモデルを見つける）

キャストの紙芝居形式のプレゼンテーションを聞きます。大学生活で今打ち込んでいることや夢、進路選びの失敗談や、高校生のときの自分への後悔など、内容はさまざま。「なりたい自分像」の具体例を見つけ、視野を広げます。

##### 3 約束（目標を設定する）

これまで見つけた憧れや、見えてきた自分の興味関心などを行動につなげるために、今日からできる小さな行動をカードに書き込みます。スタッフと「約束」をすることで、授業の興奮を日常生活につなげます。

### 学生ボランティア自身にとっても、成長の機会に

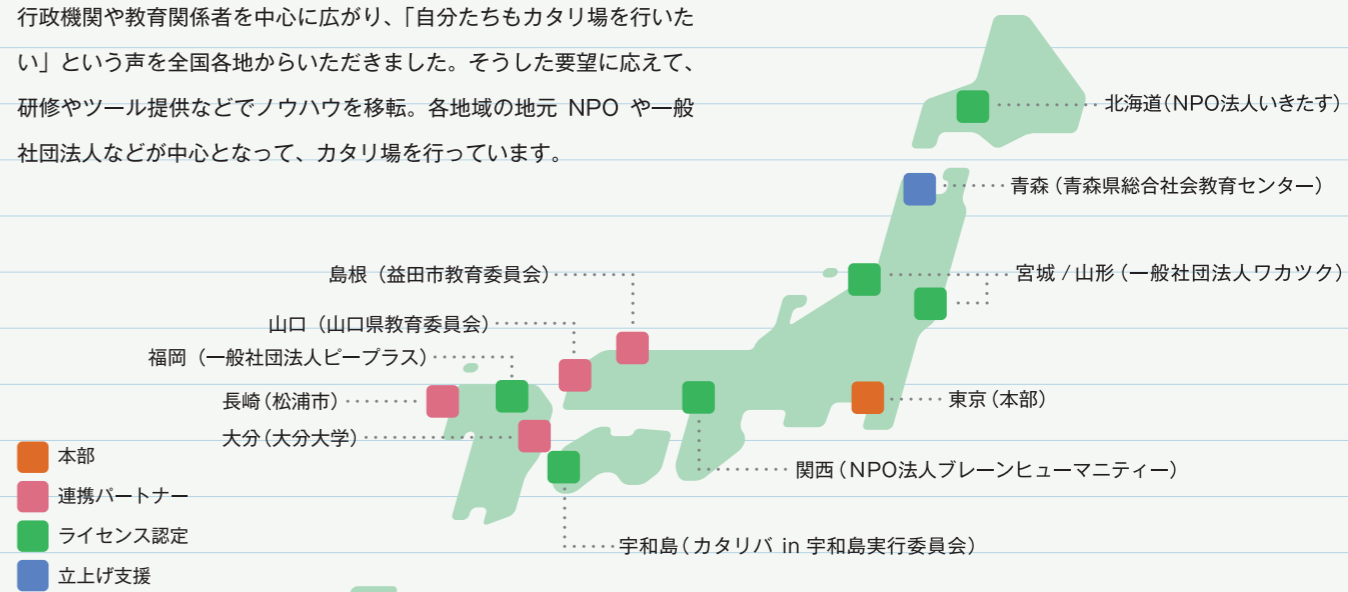
カタリ場プログラムは「キャスト」と呼ばれるボランティア・スタッフが中心となって運営しています。キャストは主に大学生や専門学校生、若手社会人など。最低9時間の研修を受けてから、高校に出向きます。「高校生の頃にもっと進路を考えておきたかった」「将来、教員を目指している」等、さまざまな動機を持った方が参加しています。

カタリ場に関わることは、キャスト自身にとっても自分を振り返るきっかけとなります。「高校生からの憧れに恥じない自分でいたい」「自分の言葉に自分自身が追いつこう」など、この活動に参加することで、前向きに進んでいくためのエネルギーをもらっているというキャストもいます。



### 全国に広がる、カタリ場

首都圏を中心に NPO カタリバが行っていたカタリ場プログラムは、行政機関や教育関係者を中心に広がり、「自分たちもカタリ場を行いたい」という声を全国各地からいただきました。そうした要望に応じて、研修やツール提供などでノウハウを移転。各地域の地元 NPO や一般社団法人などが中心となって、カタリ場を行っています。





一歩踏み出して、  
新たな夢が広がった  
高校1年生  
辰元 凛

カタリ場を受ける前の私は、勉強が苦手なダンスもうまくなって、無気力になっていました。「勉強しなさい」と母に言われても（なんでしなきゃいけないの？）と心の中で反抗していました。カタリ場に出会ったのはそんな時でした。先輩は今の私を認めてくれただけでなく、具体的なアドバイスをくれました。“まずは一週間だけ部活も勉強も頑張ってみる”という約束は今でも継続しています。先生にも「変わったね」と言われるようになりました。以前の私なら「勉強はできないから」とあきらめていましたが、一歩踏み出して頑張ったことによって、新たな夢が広がっています。もっと英語を頑張って、将来は海外とつながるようなことがしたいと思っています。



「ナナメの関係」でしか得られない  
体験は、大きな一歩につながる  
松戸市立松戸高等学校  
椿 仁三千 先生

体育館でカタリ場を初めて受けた時、十分に研修され、熱い思いを語るスタッフやキャストの皆さんに、今までに経験したことのないものを感じました。生徒たちが、年齢の近い先輩や手の届く目標に出会うことは、とても意味があります。先輩の話や、友人の話や、自分を語る。それにより、実は皆が自分と同じような悩みを抱えており、同じような壁を乗り越えて前に進んでいることに気がきます。それは生徒たちの大きな一歩につながります。これこそが「ナナメの関係」でしか得られない体験なのかもしれません。授業の終了後にいっばいの笑顔で体育館を後にする生徒たちを見ると、胸の中に熱いものがこみ上げてきます。いつもカタリ場は、進路は山の頂を目指すばかりでなく、広がっていくものであることを気づかせてくれます。多様化する教育現場は今までの指導だけでは行き届かないことがたくさん存在します。これからは学校現場だけでなく、企業、地域、NPO など様々な分野で子どもたちの教育を支えていただく必要があるのです。カタリ場の皆さんには、これからも現場に新鮮な風を吹かせていただきたいと思います。

所属・学年は2014年当時のものです

### 学校現場から、授業への評価

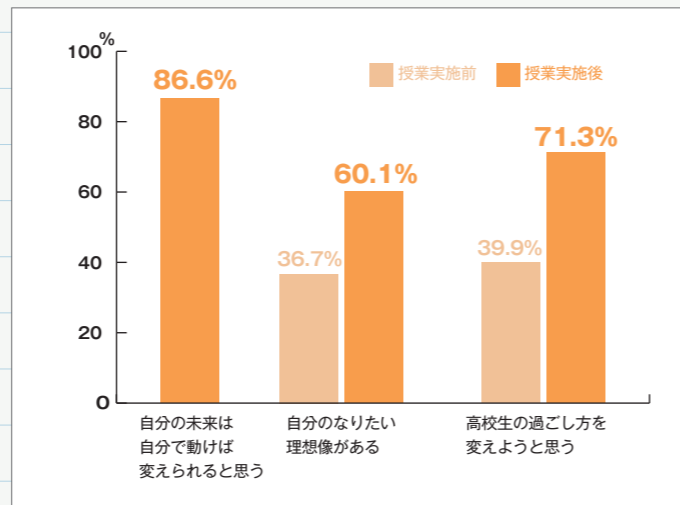
高校では、主に「進路」や「総合学習」の授業の一環としてカタリ場を導入いただいています。先生方からは、「生徒の進路意欲が高まった」「自ら将来について話し始めるようになった」などの評価を受けてます。

#### アンケート事例：東京都立大崎高校

大崎高校では夏休み前の6月、高校2年生に対して、これからの進路選択に向けて残りの高校生活の過ごし方を考える場として、カタリ場を実施しました。

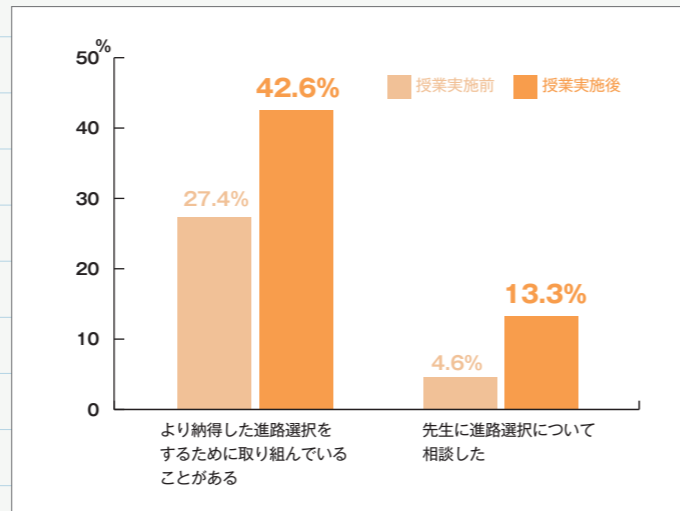
#### 効果1 進路選択に向けた意識の変化

「自分の未来は自分で動けば変えられると思う」授業参加後、86.6%の生徒が「はい」と回答  
「自分のなりたい理想像がある」と答えた生徒が23.4%増加  
「高校生活の過ごし方を変えようと思う」と答えた生徒が31.4%増加



#### 効果2 進路選択に向けた行動の変化

「より納得した進路選択をするために取り組んでいることがある」と答えた生徒が15.2%増加  
「先生に進路選択について相談した」と答えた生徒が8.7%増加



### 発展するカタリ場プログラム

高校の授業でのカタリ場から派生して、高校2、3年生向けの新しいプログラムや学校外でのプログラムなども生まれています。また行政と連携して行うプログラムや、企業研修にカタリ場を活用いただく事例もあります。

#### 進路選択にフォーカスした出張授業 キャリアリテラシー・プログラム

「キャリアリテラシー・プログラム」は、高校2、3年生を対象に、進路選択についての理解・促進を促すプログラムです。「カタリ場」同様、学生を中心としたボランティア・スタッフが授業を行います。彼らの進路選択経験を生徒と共有し、進学先の情報収集や資料請求も行うことで、将来への意識の向上を目指します。

#### 放課後に社会で学ぶ高校生のために 企業訪問プログラム / カタリバ大学

「学校ではできないような、いろんなことに挑戦したい!」「学校でも塾でも出会えない、最先端で活躍するオトナの話を知りたい」。このような意欲的な高校生の声にこたえて、学校外でイベントを行っています。週末や放課後に、企業を訪問して職場見学や、社員と語り合うワークショップなどを企画しています。

#### 企業・大学・専門学校と高校をつなぐ キャスト・ラーニング / カタリ場研修

目の前の高校生のために本気で向き合う「キャスト」になる経験を、「キャスト・ラーニング」というプログラムで提供し、大学生・専門学校生の成長を促します。また、このプログラムは学生だけでなく、「カタリ場研修」として、企業研修や企業の社会貢献(CSR活動)の機会としても活用されています。

#### 子ども・若者が主役になる地域づくりの支援 行政連携プログラム

子ども・若者が主体的に行動を起こしていくことをめざす自治体のために、オーダーメイドでプログラムを提供しています。例えば「高校生の声をまちづくりに活かしたい」という自治体と、「地域のために行動を起こしたい」という高校生が出会い、地域の魅力化につながるようなイベントの企画などを行っています。



生徒が安心して自分自身と  
向き合える場をつくりたい  
東京学芸大学 教育学部 3年生  
佐藤 安沙子

私たちボランティア・スタッフは、生徒に何かを教えるわけでもどこかへ導くわけでもありません。彼ら自身が自分の考えや気持ちに気づけるよう、対話を行っていきます。対話はお互いの価値観を交錯させること。だからこそ、私たちにも気づきが生れます。「出会えてよかった」と生徒に言われるとき、私自身も同じことを感じています。また、教師を目指す私にとって、大学生のうちから高校生の気持ちや悩みに触れられることは、将来出会う生徒のためにもなると思っています。「生徒のためのカタリ場」を追求したいという思いから、現在は企画運営を担当しています。生徒が安心して自分自身と向き合える場を、今後もつくっていきたくです。そのためにも、相手のことを本気で想い、生徒の背景や感情を汲み取る仲間を増やしていきたいと思っています。



カタリ場という「非日常」を  
「日常」へ活かす  
カタリ場事業部スタッフ  
林 曜平

私が最も意識しているのは、カタリ場プログラムが学校の中でどのように活用されていくかということです。カタリ場の授業は120分。一度きりの関わりであるこのプログラムは、強みも弱みも持ち合わせています。利害関係がなく親近感を持てるスタッフと対話することは、高校生たちにとって、普段気付かずにいる自分自身に気付くことができたり、言えなかった本音を話すことのできる貴重な機会だと考えています。ただ、日常に戻ったときにそこで感じたことが活かされていないのは、とてももったいないことだと感じます。学校の行事と結びつけたり、生徒の情報を先生方に引き継ぐなど、その学校に合った接続の方法を先生方と相談しながら実施しています。授業の効果が最大化する状態を、先生方と一緒につくっていきたくと思っています。

所属・学年は2016年当時のものです



コラボ・スクール



## 被災地の放課後学校 「コラボ・スクール」

コラボ・スクールは、被災地の子どもたちのための放課後学校です。宮城県女川町、岩手県大槌町、熊本県益城町で、幼児～高校生に学習支援と心のケアを行っています。

### 勉強する場所を奪われた子どもたちに、 落ち着いて勉強する場所を提供

震災により仮設住宅で暮らす子どもたちの教育環境は今もまだ十分に回復していません。狭い仮設住宅では、一緒に暮らす家族に気兼ねし、勉強に集中できない子どもたちがいます。コラボ・スクールでは落ち着いて勉強する場所がない子どもたちに、放課後の学習支援を行っています。集団授業や個別指導などのほか、自習室も開放。集中して勉強できる環境を提供しています。

### 子どもたちにとっての「居場所」は、 心のケアにつながります

大きな災害の後には、大人でも精神的に傷いたり、メンタル・ケアが必要になったりします。ましてや子どもたちにとってはなおのこと。コラボ・スクールのスタッフは、一人ひとりの様子を見て声をかけたり、時には相談相手になったりします。全国から集まったスタッフやボランティアなど、少し年上の先輩との「ナナメの関係」にもとづく対話が、子どもたちにとって将来を考えるきっかけとなった例も多くあります。

### 2011年に東北の女川町、大槌町で、 2016年に熊本県益城町で開設

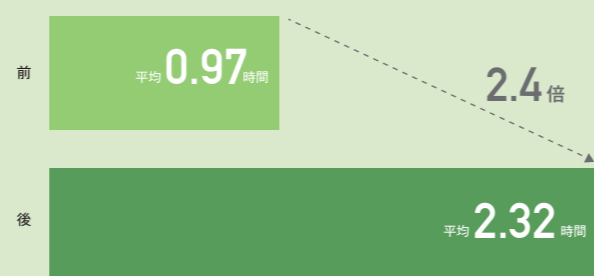
2011年の東日本大震災以降、子どもたちに震災の悲しみを強さへ変える力を届けることを目的に始まったコラボ・スクール。これまでに、たくさんの子どもたちが学習の機会と新たな出会いを得て、成長していきました。ここで培った知見・経験を活かし、2016年の熊本地震の際は、もっとも被害が大きかった熊本県益城町に新たなコラボ・スクールを立ち上げました。

### 生徒の学習時間が、2.4倍にアップ

2015年度に、大槌臨学舎に通う子どもたちに行ったアンケートによると、コラボ・スクールに通う前と通った後では、勉強時間が約2.4倍に増えたことが分かりました。

保護者へのアンケートでも、「コラボに通って学習に前向きになり、なにより勉強を楽しく感じてるのがとてもいい」「とても経験豊富なスタッフや学生の方と触れ合う場合は、勉強以上の大きな刺激を受けている」等の言葉をいただきました。

コラボに通う前・後の勉強時間の変化



## コラボ・スクールでの教育内容

コラボ・スクールでは、放課後に安心して学べる場所をつくり、震災で遅れた学習をサポートしています。それだけでなく、震災前には体験できなかった、グローバルな交流や社会で活躍する大人との出会いも、教育機会として提供。子どもたちが、震災の「悲しみ」を「強さ」へと変え、未来の復興を担うリーダーへと育つことを目指しています。

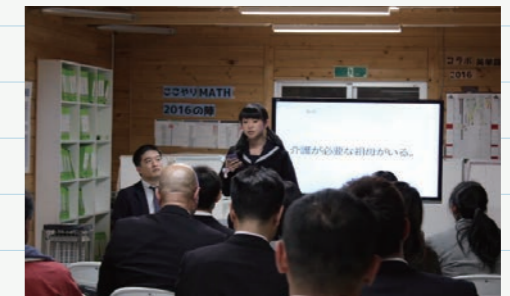
### 基礎学力を身につける

講師が指導を行う一斉授業のほか、ボランティアの「学習サポーター」による個別指導など、一人ひとりの学力に合わせたきめ細かい指導を行っています。それ以外にも、自習室やプリント学習などを通じて、掲げた目標に向けて到達度をはかりながら自律的に勉強を進められるような環境を用意しています。また最近では、タブレットを活用したICT教育による学習支援も進めています。



### 課題解決型学習プログラム「マイプロジェクト」

「マイプロジェクト」は、高校生たちが地域や身の周りの課題を見つけ、その解決のために計画を立てて実行していく学習プログラムです。「支援されるだけ」という立場を卒業して、支えてくれた人に恩返ししたい」「町の復興のために、私たちもできることがしたい」という、コラボ・スクールの高校生たちの想いから生まれました。この取り組みは被災地から全国に広がり、今では全国大会が行われるイベントになりました。※詳しくはこの冊子の14ページ「マイプロジェクト」をご覧ください。



### グローバルな活躍への第一歩となる、英語教育

震災後には、海外からの支援など子どもたちが「世界」を感じる機会も増えました。英語をより身近に感じ、復興を担うグローバル人材に育つための第一歩として、英会話の習得に力を入れています。インターネットを通じたネイティブ講師との会話や、被災地を訪れた外国人との交流プログラム、東京にあるアメリカの大学への国内短期留学などを行いました。



### 卒業生が上京して先輩や大人と触れ合う 「やくそく旅行」

コラボ・スクールの中学3年生が、卒業後の春休みに上京する「やくそく旅行」では、「マイプロジェクト」の全国大会を見学したり、ご支援いただいている企業などを訪問しています。日常から一歩踏み出してがんばっている高校生や、社会で活躍する大人たちとの出会いが、「なりたい大人像」を考えるきっかけになることを願っています。



### その道のプロに学ぶ、特別授業

コラボ・スクールでは、プロフェッショナルに活躍する大人との出会いを通じて様々な学びを取得する機会を設けています。これまでに天文学者、ゲームクリエイター、プロサッカー選手やジャズピアニストなどを講師に迎えました。また、プログラミング講座や「地域のよさを伝えるCMづくり」など、子どもたちが実際に「つくる」学びも経験しています。



### 震災を学びに変える「教育旅行」

震災を知ることは、被災地以外の子どもたちにとっても大きな学びとなります。「教育旅行」は、修学旅行などの機会を利用して被災地を訪れ、現地の大人や同世代の中高生との交流を通して、震災を「自分ごと化」して考えるプログラムです。「被災地は大変だった」という感想だけで終わるのではなく、「学校に戻ったらこれをしていきたい」という行動目標を立てるなど、「震災を通して、日常に繋がる学びを生み出す」ことを目指しています。





## 女川向学館 ONAGAWA KOUGAKUKAN

コラボ・スクールの1校目「女川向学館」のある宮城県女川（おながわ）町は、東日本大震災による津波で大きな被害を受けた町です。住宅倒壊率は82.6%と被災地で最も高く、町立第二小学校の児童の9割、第一小では4割が津波で自宅を消失しました。仮設住宅などで暮らし、落ち着いて勉強する場所を失った子どもたちのために、女川向学館では、避難所として使われていた小学校を借り、主に小中学生に学習支援と心のケアを行っています。

設立 2011年7月4日 準備開校（8月4日本開校）  
 場所 旧女川第一小学校校舎1階（宮城県牡鹿郡女川町浦宿浜字門前4）  
 対象 幼児～高校3年生



## 震災から6年が経過し、「緊急支援」から「継続支援」という新たな段階へ

女川向学館スタッフ  
 多田 有沙

学生時代は学生インターンとして「カタリ場」に参加していました。大学卒業後、一般企業に就職したのち、自分の原点はカタリバにあると感じカタリバに転職しました。震災から6年が経過し、「緊急支援」から「継続支援」へとフェーズは移ってきています。女川の町にも新しい商店街ができ、家も建ち並び始めました。私がこの町に来てから出会った子どもたちの中には、震災で大切な人を失った子どもたくさんいます。子どもたちと日々接する中で感じることは、言葉には出さなくとも、子どもたちの中で震災の記憶が消えたわけで

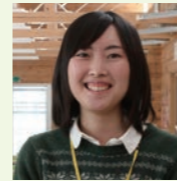
はないということです。同時にあの時のことを心の中に持ちながらも、前を向き歩み続けているということも強く感じます。「あの時、助けてもらった分を今度は自分が返していきたい」これは、向学館に通う高校生の言葉です。全国のみなざまからのたくさんの支援は子どもたちの「今を生きる力」となっています。悲しみや辛さを経験した彼らだからこそ、人一倍、優しく心深く成長できると信じています。世間では、震災の記憶が薄れつつありますが、これからも女川町と子どもたちを応援し続けていきたいと思っています。



## 大槌臨学舎 OTSUCHI RINGAKUSHA

コラボ・スクールの2校目「大槌臨学舎」のある岩手県大槌町は、東日本大震災による津波と火災で大きな被害を受けた、三陸沿岸の町です。全人口15,944人のうち死者・行方不明者は合わせて1,284人。住居倒壊率は64.6%と被災地で3番目に高く、町庁舎も津波で崩壊しました。仮設住宅などで暮らし、落ち着いて勉強する場所を失った子どもたちのために、皆様からのご寄付で設立。現在、小中高生に学習支援と心のケアを行っています。

設立 2011年12月13日 準備開校（12年1月23日本開校）  
 場所 岩手県上閉伊郡大槌町21地割字高清水84番地5  
 対象 小学3年生～高校3年生



## 子どもたちに何かしたいと思って被災地に飛び込みましたが、むしろ私自身がたくさんの学びを得ています

大槌臨学舎 学生インターン  
 佐古田 遥香

短期のボランティアを経て、現在は大学を休学しインターンとして活動しています。ボランティアとして参加した際、「コラボ・スクールは自分がこれまで感じてきた社会の閉塞感を、打ち破るような可能性を秘めているのではないか」と感じる機会が多くありました。子ども自身が「自分は尊重されている」と思え、自分の可能性や未来に希望を持てること。コラボ・スクールはそんな社会を実現したいのだと気づいたとき、突き動かされる何かがありました。ただ、たった2週間のボランティア活動で感じたことに確証はありませんし

た。だからこそ、より「当事者」として子どもの成長に関わりたいたいと思い、インターンへの参加を決意しました。私は教育を専門的に学んでいたり、元々岩手に縁があるわけでもありません。そのため、日々悩んだり、チャレンジすることは多いです。それでも、カタリバが価値としているナナメの関係の体現や、子どもたちの居場所を増やしていくことは自分にもできるという実感があります。子どもたちに何かしたいと思って被災地に飛び込みましたが、むしろ私自身がたくさんの学びを得ています。



## ましき夢創塾 MASHIKI MUSOJUKU

2016年の熊本地震により大きな被害を受けた熊本県益城町で、コラボ・スクールの3校目となる「ましき夢創塾」がスタートしました。益城町の全壊家屋率は約3割、4月16日の本震の翌日には町民の約半数にあたる16,050人が避難を余儀なくされました。カタリバは2016年6月から、益城町にある二つの中学校で放課後学習支援を行っています。2016年11月からは、仮設団地の集会所を利用した夜間学習会も始めました。

設立 2016年6月活動開始（仮設団地での夜間学習会は、11月28日本開校）  
 場所 木山中学校、益城中学校、テクノ仮設団地集会所  
 対象 中学1年生～高校3年生



## 震災を体験して、「勉強できることは当たり前ではない、できる時にやらない」と思うように

ましき夢創塾 中学3年生  
 磯部 晏 さん

新学期に震災が起こり、勉強が遅れることにすごく焦っていました。そんな中始まったのが夢創塾でした。勉強ができる場所と、勉強を教えてくれる人がいる。そんな良い環境があったから焦りを行動に移すことができました。やっと、2学期くらいから自分の部屋でも過ごせるようになりました。余震も減って落ち着いてきたけれど、頻度が減った分、たまにある地震はとても怖いです。将来、行きたい大学があります。そこに行くためにも、今は高校受験をがんばりたいと思っています。ましき夢創塾は先生たちと楽しくコ

ミュニケーションをとりながら、とても集中して勉強に取り組める場所です。勉強だけでなく、悩みがあれば聞いてくれるので、それで元気になる子どもたくさんいます。震災を通じて私は「勉強できることは当たり前ではない、できる時にやらない」と思うようになり、自主的に勉強することが増えました。学習会のおかげで、今では遅れも少しは取り戻せたかなと感じています。たくさんの方々の応援があって、こうして学べることにとても感謝しています。



マイプロジェクト

マイプロジェクト

## 高校生が、社会課題の解決に チャレンジ「マイプロジェクト」

「マイプロジェクト」は、高校生のための課題解決型学習プログラムです。地域や身の周りの課題に気づき、その解決のために立ち上がった高校生たちが、想いを行動へと移す活動をサポートしています。

### 「町の復興のために、できることをしたい」 被災地の高校生の想いからスタート

マイプロジェクトが生まれたのは、東日本大震災で大きな被害を受けた岩手県大槌町。「支援されるだけ」という立場を卒業して、支えてくれた人に恩返ししたい「町の復興のために、私たちもできることがしたい」という想いが、被災地の放課後学校「コラボ・スクール」で学んだ高校生に芽生えました。自らプロジェクトを立ち上げ、いきいきと挑戦する彼らをサポートするなかで気づかされたのは、「当事者意識を持って地域課題に取り組むことは、絶好の成長の機会となる」ということでした。

### 社会で求められる力を、 プロジェクトを通じて身につける

現在、2020年に行われる国の教育改革に向けて、アクティブラーニングの重要性が高まっています。しかし高校生にとって、主体性や思考力、判断力といった社会で重視される能力を育む機会は十分にはありません。そこで、高校生が自らプロジェクトを立ち上げ実行することを通して、それらの能力を身につけるのがマイプロジェクトです。



### 「不登校」「防災」「伝統工芸」など、 全国から多くの高校生が参加

マイプロジェクトに取り組む高校生は、北海道から沖縄県まで全国に広がっています。全国大会が行われるようになった2013年度からこれまでの間に、多くのプロジェクトが立ち上がりました。

#### 不登校経験を、人生の糧にしてほしい Fline 末本晴香、松本理沙（福岡県 高校1年生）

不登校の子どもたちが、その経験をこれからの人生の糧にできるようサポートしていく活動をしています。プロジェクトのメンバーは、全員不登校経験者です。不登校という経験を、決して無駄にしたい。将来に生かして欲しい。そんな思いから、不登校同士の仲間づくりや進学、進級のための学習活動などを行っています。



学年は2014年当時のものです

### プランを作るだけでなく「実行する」ところまで、 高校生に伴走

マイプロジェクトでは、「スタートアップ合宿」「オンラインゼミ」「マイプロジェクトアワード」という3つのプログラムを用意し、高校生が仲間やメンターとなる大人たちと関わることで、彼らの学びがより深いものになるよう応援しています。



#### STEP1 スタートアップ合宿（プランニング期間） 例年8～10月

プロジェクトに実際に取り組んだ先輩たちの話を聞いたり、自分の興味関心を掘り下げて考える中で、自分のプロジェクトを見つけ出します。

#### STEP2 オンラインゼミ（アクション期間）秋から冬にかけて

プロジェクトの実行を、遠隔でサポートします。遠方でも利用可能なインターネットのビデオ通話を活用して、高校生同士の活動報告をしつつ、大人からもアドバイスをもらうゼミを実施します。

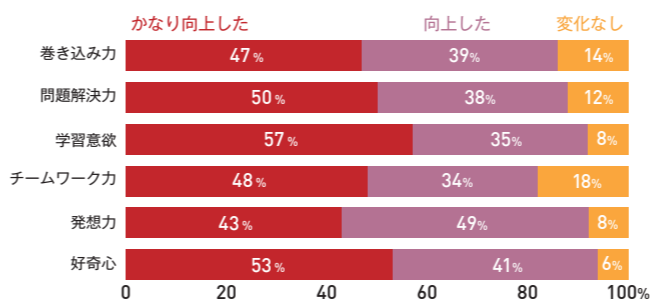
#### STEP3 マイプロジェクトアワード（リフレクション期間） 例年2～3月

全国でプロジェクトを実行してきた高校生が一堂に会し、自分たちの活動をプレゼンテーションします。マイプロジェクトに取り組む前と後を振り返り、経験を学びに転化する「リフレクション」（振り返り）も行います。

### 参加者の9割が、 「問題解決力やチームワーク力をつけた」と実感

正解のない課題に対して仮説を立て、解決しようと行動する経験は、主体性や思考力といった知識活用型の力を身につけるまたとない機会になります。マイプロジェクトに参加した高校生の9割が、「問題解決力」「チームワーク力」「学習意欲」などが向上したと答えています。

マイプロジェクトに取り組んでそれぞれの力が向上したと感じますか？  
ほぼ全ての方で9割が「向上した」以上に回答



### 大人たちの協働が、高校生の意欲に火を灯す

高校生が途中で挫折せずにプロジェクトをやりきるためには、周囲の大人たちによる継続的なサポートが不可欠です。参加する高校生の多くは「何かやりたいけれど、どうやればいいかわからない・・・」という思いを抱えています。オンラインゼミでは、教育関係者や様々な経歴の社会人、また大学生などが、高校生たちの社会活動をサポートする体制をつくっています。



褒められたり突っぱねられたり、  
「生」の体験が社会を知る機会に  
マイプロジェクト事務局 和氣英一郎

マイプロジェクトに参加することで、高校生たちは主体的に行動した結果、いろんな体験をすることができる。褒められたり、突っぱねられたり。そんな「生」の体験が彼らにとって、社会を知る良い機会になっているところに価値を感じています。参加者の一人に、プロジェクトに取り組む中で成績が上がったという子がいました。「学校の成績が落ちたら活動をやめなくてはならない」。そうならないためにも、効率よく勉強するようになったそうです。スケジュール管理や優先順位をつけて行動することなど、マイプロジェクトから学んだと話してくれました。マイプロジェクトに参加することが、社会を生きる上で重要な経験になっていることを実感しています。





b-lab



## いつでも、なんでも挑戦できる 中高生の秘密基地「b-lab」

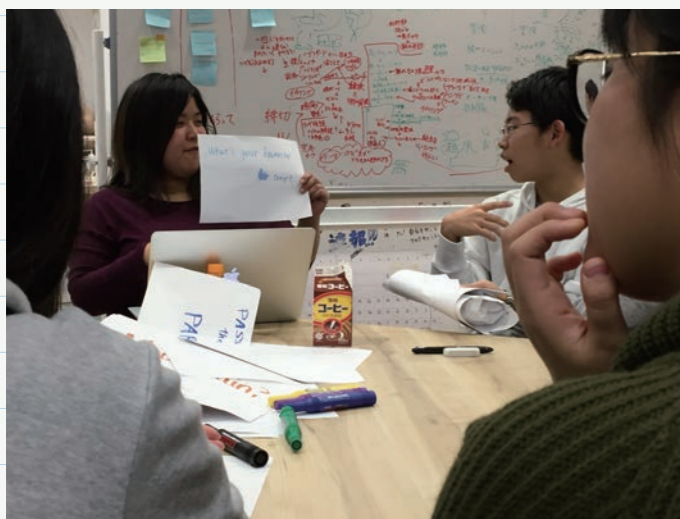
2015年4月からカタリバは、東京都文京区から委託を受けて文京区青少年プラザb-lab(ビーラボ)の運営を行っています。b-labは、いつでも、なんでも挑戦できる中高生のための秘密基地です。学校とも塾とも違う、新しい放課後を作っています。

### 中高生が放課後に安心して集まることのできる 「居場所」をつくりたい

現在の中高生は、学校、部活、塾など、毎日をととても忙しく過ごしていますが、それ以外の居場所がなかなかないというのが実情です。b-labは異なる学校・学年の仲間との交流や普段出会わない大人との接点を増やし、そうした関わりの中で子どもたちの「やる気」を育む中高生のための居場所です。子どもたちがいつでも何にでも挑戦できるよう、安心して集える環境づくりを目指しています。

### 年間のべ約 27,000 人の中高生が来館

学校への広報活動や、中高生どうしの口コミを通じて利用者が増えています。2015年9月～2016年8月までの1年間で、文京区に在住・在学の中高生のべ約 27,000 人が来館しました。



### 中高生の主体性を引き出す場

b-labは、中高生が安心して自由に過ごせる居場所であるとともに、文化、スポーツ、学びに関するイベントを通じて自分の可能性を発見する場でもあります。

#### 1 b-labを“知る” (出張b-lab、フリーペーパー『Cha!Cha!Cha!』)

文京区内の中学校や高等学校へ出張して、キャリア教育プログラム「カタリ場」を行い、自分自身を見つめ直すきっかけを届けながら、b-labという存在を知る機会をつくります。また、中高生スタッフが中心となって制作している中高生のためのフリーペーパー『Cha!Cha!Cha!』を、年に2回発行しています。

#### 2 b-labに“来る”(b-labでのイベント運営)

b-labでは年間を通じて、学習支援、音楽、スポーツなど様々なイベントを実施しています。イベントをきっかけに中高生たちは来館し、イベントに参加することで自分自身の可能性や興味・関心を発見します。

#### 3 b-labで“アクションする” (中高生自主企画運営サポート)

自分自身の興味・関心や可能性を見つけた中高生たちが、自らイベントの企画・運営、プロジェクトを実行するために、職員やボランティア・スタッフは彼らの挑戦をサポートします。



### 「ナナメの関係」による居場所づくりの支援

中高生が安心して自分を表現できる場をつくるために、b-labでは大学生を中心としたボランティア・スタッフ(フロアキャスト)も運営に関っています。親でも先生でもない、少し年上の先輩として中高生と接し、何気ない話から彼らの興味を引き出します。また、中高生と一緒に企画をつくり、彼らの「やりたい」をかたちにします。



### 読書会や音楽体験、料理企画など多彩なイベントを実施

「自習応援! マナビ場」などの学習支援やテーマを決めた読書会、ダンスや音楽、スポーツなどを体験する「はじめて講座」、さらに料理などの多彩なイベントを通じて中高生の興味・関心を引き出しています。

### 自主企画でリーダーシップを育む

「ライブをやりたい!」「路地裏マップをつくりたい!」b-labを拠点に、中高生たちのさまざまなプロジェクトが生まれています。自主企画を運営することによって、他人を巻き込みながら自分の「やりたい」にリーダーシップを持って取り組む力を育てています。

### 区内の学校との連携

b-labの職員とボランティア・スタッフは、施設内で活動するだけでなく、文京区の教育機関と連携しながら施設の外にも飛び出しています。区内の中学校・高校において、キャリア学習プログラム「カタリ場」を行う「出張b-lab」や、放課後の学習支援などを行っています。



自分たちの居場所は  
自分たちで良くしたい  
文京区在住の高校2年生  
深山功吉さん

僕はb-labにて音楽関係のイベントを運営、盛り上げる担当の中高生スタッフです。僕はb-labを利用したり、ライブに出演したりする中で、音響面の問題点を感じました。それは例えば…「自分の作り込んだ音が本番では出ていない」「ギターやボーカルが聞こえにくい」「ドラムの音が他の音に比べて大きい。」「ハウリングが多い」などです。

僕は以上の問題を解決するために、b-labに新たなメインスピーカーを導入しようと考えました。ライブイベントに参加した経験のあるバンドメンバー21人にアンケートを取り、自分だけの意見でないことをまとめました。その後、b-labのスタッフや、区役所の方に対してメインスピーカーの導入によって、音質、音量、バランス等の改善が見込めることを説明し、理解していただくことができました。

自分たちで、自分たちの居場所を良くしていく。b-labはそのチャレンジを応援してくれる場所だと思っています。

学年は2016年当時のものです



おんせんキャンパス



## ふるさとの課題解決を担う人材を、 地域の子どもたちから育てる 「おんせんキャンパス」

島根県雲南市から委託を受けて、「町づくり」を「教育」からサポートする取り組みを行っています。人口減少など地域課題を「自分ごと」として考え、解決に向けて行動できる人材へと子どもたちを育てていきます。

### 地域の未来を牽引していく人材の輩出を目指す

島根県雲南市は、少子高齢化や人口流出、財政難など、多くの地域が将来に直面すると言われる課題に真っ先に取り組まざるを得ない「課題先進地域」です。なかでも人口問題は深刻で、1950年にピークを迎えた人口（約6万9千人）は、2014年には6割以下（約3万9千人）まで減少しました。こうした課題先進地域にとって、若者は地域の未来を担う貴重な人材ですが、大学進学や就職を機に市外へ出てしまい、過疎化が進行しています。そこで、ふるさとを将来的に牽引していく人材の輩出を目指して、2015年6月にスタートしたのが「おんせんキャンパス」です。

### 自分の可能性を見つけ、チャレンジできる機会を

おんせんキャンパスが目指すのは、子どもたちと社会を結びつけ、地域課題を「自分ごと」として考える機会を届けること。現在は、中高生向けに土曜日を活用したキャリア教育と、不登校児童の自立支援の2つの活動を行っています。

### すべての大人が教育の担い手。ともに地域の魅力化を考える

雲南市は市内に大学がないため、中高生が自分たちの「ロールモデル」となるような、少し年上の先輩と出会う機会はほとんどありません。だからこそ、市外・県外に多くの協力者をつくり、地域の魅力化と一緒に取り組んでいます。たくさんの大人たちが「教育の担い手」として参加し、子どもたちに新たな視座を得る機会を届けています。



### 「課題先進地」から「課題解決先進地」を目指して

私たちが目指す未来は、雲南市が「課題先進地」から「課題解決先進地」になること。社会とのつながりを早くに持つことで、若者たちが地域課題の解決に向けて自ら行動を起こすマインドを身につけ、魅力ある町づくりの担い手となってくれることを目指します。



やってみたい気持ちを応援してくれる人、手を貸してくれる人がいる  
高校3年生 福間はるかさん

自分の思い描いていた高校生活から離れている自分にモヤモヤしていた時に出会ったのがカタリバ。そこでわかったことは、やってみたい気持ちを応援してくれる人、手を貸してくれる人がたくさんいるということ。体験することで将来の選択肢が増えていくということでした。難しく考えていても何も変わらない。それよりも実際に動いてみる方が簡単でずっと楽しい。必要なのは、最初の一步を踏み出すほんの少しの勇気だけ。そんな勇気を、今度は自分が地域の人や周りの人に与えられる存在になることを目指していきたいと思います。

学年は2015年当時のものです

アダチベース



## 困難を抱える子どもたちに 安全基地を届ける「アダチベース」

2016年7月。カタリバは東京都足立区から委託を受け、貧困世帯の子どものための支援事業を始めました。中学生のための居場所兼学習支援事業「アダチベース」です。困難を抱える子どもたちに、安心して利用できる居場所と勉強できる環境を用意し、彼らの自立する力を育てています。

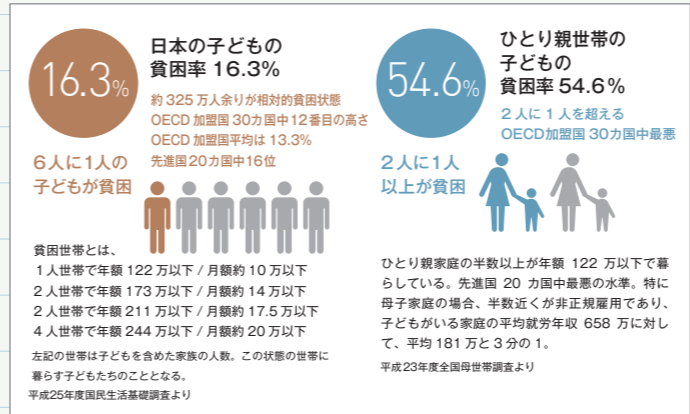


### 「子どもの貧困」という重い課題

平成25年の国民生活基礎調査（厚生労働省）によれば、日本における子どもの貧困率は16.3%に上ります。この数値は「子どもの6人に1人が貧困状態にある」ことを示しています。自分自身の力ではどうすることもできない環境の中、様々な生きづらさを抱えている子どもたちが、ここ日本にもたくさんいます。

カタリバはこれまでの中高生との関わりの中で、複雑な家庭環境などの問題を抱えている例を見聞きしてきました。困難な家庭に育ち、適切なサポートが得られずに成長すると、未来を思い描く力を育む機会を逸し、次の世代へ貧困が引き継がれてしまう可能性があります。

子どもたちが抱える背景を変えることはできません。しかし、あるがままを受容してもらえて、意識と学びを支えてくれる安全基地のような人の存在があれば、貧困の連鎖を断ち切る「力」を人は育むことができるのではないか。そうした力を育むための居場所づくりを目指して、新たな事業に取り組むことを決めました。



### 子どもの貧困対策に力を入れている足立区から事業を受託

「全ての子どもたちが生まれ育った環境に左右されることなく、自分の将来に希望を持てる地域社会の実現を目指します」。足立区は平成27年度を「子どもの貧困対策元年」と位置づけ、対策を開始しました。そんな足

立区と、子どもの貧困対策事業を考えていたカタリバが出会い、事業を受託することに。2016年7月、困難な環境で育つ子どもたちがそのままの自分を受け入れ安心できる居場所として、「アダチベース」が誕生しました。

### 生まれ育った環境に負けない力を子どもたちに

アダチベースでは、学習支援や体験プログラムを通して子どもの居場所づくりを行っています。対象となるのは、足立区から紹介されて登録を行った中学生。普段は補習授業や自習で基礎学力を向上させながら、定期的に芸術や身体を使ったワークショップなどの体験プログラムも行い、子どもたちが自分の世界を広げていくことを目指しています。



チャレンジの機会をたくさん用意しながら、安全基地を創っていきたい  
アダチベース職員 加賀大資

アダチベースで子どもたちと関わる中で、どの子ども「できるようにになりたい」と思っていること、そして一人ひとりがその「できる芽（可能性）」を持っているんだということ、日々感じています。誰にとっても、できないことができるようになることはうれしいことであり、成長できることは喜びにつながっていくはず。ただ、置かれている環境やこれまでの経験などから、そうした気持ちを持つことを最初から諦め、自分の可能性に蓋をしまっていることが少なくありません。ここアダチベースでの勉強や体験企画はあくまでツールです。これらのツールを活かして、彼ら自身が蓋を取り除き、自分にもできるんだという思いを感じてもらいたい。

そのためには、まず子どもたちの心の容器に「安心感」を貯めていき、そこからちょっぴり背伸びしたチャレンジができる場にしていきたいと思っています。そうしたチャレンジから得られる小さな成功体験が自信となり、その子の将来につながっていくと信じています。

# たくさんの方々と一緒に、子どもたちの未来を創っています。

カタリバはたくさんの方々と連携して、子どもたちに“きっかけ”を届ける活動を行っています。

カタリバの活動は未来をデザインする



佐伯 由紀子  
地域活動応援団員

「高校時代に受けたカタリ場の授業が自分のことを考えるきっかけになった。今度は自分がキャストとして高校生と関わりたい」これは、ボランティア説明会に参加していた大学生の言葉です。その目は優しさと強い意志に満ち溢れていました。こうしたキャストが、途方にくれる子ども達と真剣に向き合うことで、子ども達は自分のことに気付き、考え、夢を叶える一歩を踏み出すのだと思います。自身の子育てを終えた者として思うのは、教育とは未来を創ること。「カタリ場」と東北の「コラボ・スクール」の活動は、一人一人がいきいきと輝ける未来をデザインすることに他なりません。そんなカタリバをこれからも応援させていただきます。

“心の宝物”を再確認する機会を与えてくれる



野々垣 みどり  
キャリアカウンセラー、ワークショップ ファシリテーター  
株式会社エマーゼンス代表取締役

私たちはそれぞれに大切にしている“心の宝物”を持っています。でも、曇って見えなくなってしまう、存在すらしていなく感じてしまったりする時があります。そんな時、再確認をする機会を与えてくれるのがカタリバです。“心の宝物”と、そのエネルギーこそが、一人一人が自分らしく輝く人生を歩むために必要なものです。一人一人の大切な“心の宝物”を手に、昨日よりちょっとだけ前に進み、自ら育んでいくキッカケと勇気引き出してくれる…そんな役割を果たしているカタリバを、これからも応援していきたいと思っています。

ナナメの関係性を心から応援しています



館山 丈太郎  
独立行政法人国際協力機構 (JICA)

「知らないことは遅べない。」私は大学卒業以来、高校生の進路選択の幅を広げるようなことをしたいと思っていました。カタリバに出会い、自分がずっとやりたかったこと、いやそれ以上のことをしているカタリバに魅了され、応援させていただいています。高校生の周りに大人って実はあまりいないのです。だから、昔も今も、高校生は親の関心や自分の能力を起点に、狭い選択肢で進路を考えがちです。人生の成功モデルがない今の時代だからこそ、一人一人の生徒に向き合い、彼らの未来を切り拓く力を自覚めさせる活動がとて求められています。大学生や社会人のセンパイが生徒と結ぶナナメの関係を心から応援しています。

私達の活動を、“お金”と“気持ち”で  
支えてくださっているのが、  
寄付者の皆様です。

世界に誇れるカタリ場の力



池上 淳一  
千葉県立船橋啓明高等学校

カタリ場のキャストたちは、初対面の生徒の本音や新たな目標をいとも簡単に引き出してしまふ。カタリ場には、真剣な対話、生徒の目の輝き、約束後の笑顔が会場全体にあふれている。無関心だった生徒が少しずつ心を開き、自分のことを語り始める。そんな奇跡に何度も遭遇してきた。教育現場に導入された施策がある。例えばインターンシップはアメリカ、ジョブカフェはイギリス、デュアルシステムはドイツの模倣でしかない。しかし、カタリ場の授業はジャパンオリジナルかつ世界に誇れる教育プログラムだと確信している。震災後には、復興と未来を担う子ども達の学びの場「コラボ・スクール」を多くの人たちと協働しながら創りあげた。「社会全体で教育を支える」を着実に実現しているカタリバを、私は応援している。

情報端末では得られない「熱」を、  
全国へ届け続けて欲しい



保母 普武  
一般社団法人不動産協会

新聞記事でコラボ・スクールの活動を目にしたのがカタリバとの出会いでした。勤務先の被災地支援の内容を取りまとめていく過程で、カタリバの「ナナメの関係性」についてもお話を伺い、子どもを持つ親として大変共感し、個人としてもサポートしたいと思いました。カタリバのスタッフやボランティアスタッフの方々の「声」には、情報端末等では得られない「熱」があります。高校生がその「熱」に直接触れることで、思い悩みながらも将来に向け、一歩前に踏み出すきっかけになるのではないのでしょうか。是非、その「熱」を全国の高校生に届け続けて欲しいと願っています。

自分が出会えた「きっかけ」を生徒にも届けたい



朽木 夢  
写真館

カタリ場は、大学生だった私にも一歩踏み出す勇気をくれました。消極的だった私がキャストとして参加していくうちに、いつの間にか人前で話せるようになっていたのです。本気で話せるのは、受け入れてくれる環境があるからです。高校生たちにもそんな心地よさを感じてもらいたいです。思って毎回準備をしてきました。会ったことがない、そして今後も会うことはないであろう生徒の為に、どうしてこんなにも心を注げるのでしょうか。それは、私が出会えたような「きっかけ」を生徒に届けたいからです。キャストとして参加する機会が減ったけど、サポーターとしてずっと応援しています。これからカタリ場に出会う高校生たちの為に。

カタリバは「新しい公共」活動



寺脇 研  
カタリバ大学 学長  
京都造形芸術大学 教授・映画評論家

活動の内容を聞いた瞬間、すばらしいと思った。子どもが成長していく過程で、ナナメの関係が必要というのは以前からの私の持論である。文部科学省時代に、学校五日制や地域が運営する課後教室の実施に力を尽くしたのはそれ故だ。しかし、高校生に大学生や若い社会人がナナメの関係を作るという発想は新鮮だった。行政の発想を超えた、まさに「新しい公共」活動である。カタリバに集う若者の思考を鍛える「カタリバ大学」の「学長」としてお手伝いができるのを、嬉しく思う。被災地で続いていく活動を含め、カタリバの活動がますます盛んになるよう願っている。それが、「新しい公共」に若者を惹きつけると信じているからだ。

人事チームを労務管理からサポート



根岸 雄高  
特定社会保険労務士 / 中野人事法律事務所

発展を続けるカタリバの中で、着実に増え続ける職員の皆さまを支える人事チームのサポートをさせて頂いております。カタリ場やコラボ・スクールといったカタリバ本来の事業はもちろんのこと、組織を支える職員の方々の「働く場」を整備し、改善するといった取り組みは、今後の発展を見据えたうえで、欠かせない取り組みであるとも言えます。働く場に関する取り組みを大切に考えていることが、人事チームの皆さまの前向きな姿勢や明るい表情から感じることができ、サポートするはずの私がかえって元気を頂いているほどです。職員の方々の熱い想いや誇りを支えることで、カタリバの発展と社会に貢献できるよう、引き続き、人事チームの皆さまと一緒に取り組んでまいります。

「共に考え、共に学ぶ」ことを大切に



三箇山 優花  
職員 / 共同創設者

2015 年度より、療養、産育休から復職させてもらうことになりました。またこうして走れることに、心から感謝の気持ちでいっぱいです。そして今、改めて思うことは、カタリバの立ち上げ当初からずっとこだわってきた、「教える」「与える」「〜してあげる」ではなく「共に考え、共に学ぶ」ということ。0 歳児と日々格闘しながらも、このスタンスを大切にしていきたいと強く感じています。チャレンジには、大きいも小さいもなく、0 歳も 100 歳も関係ないものです。その意志と可能性を信じて、共にたくさんの方を考えつつ、つくりつづけていきたいなと思っています。

前に進むための勇気を、多くの高校生へ…



酒井 稔  
理事 / 株式会社 BOLBOP 代表取締役会長

誰だって、自分の人生を生きるのに精一杯です。実際に厳しさを増している、この競争社会で生き残るのは、とても大変なことだし、不安もたくさんあります。でも、だからこそ、不安なのは自分だけじゃないことを、人は知る必要があるように思うのです。誰もが、不安を持ちながらも、とにかく前に進もうとしています。そうした、前に進むための勇気を、ほんの少しずつ、できるだけ多くの高校生たちに届けることができました…。僕は、そんな気持ちで、カタリバに参加しています。

カタリバとの連携・協働で教育に充実を



士江 博昭  
雲南市教育長

カタリバの「教育を学校に丸投げしない」という考えは、学校教育と社会教育の連携・協働を目指している私の想いと軌を一にするものである。今、学校には、「チーム学校」の重要性が叫ばれ、行政には、ネットワーク型行政が求められている。まさに、カタリバの出番であると思う。今年は、中学3年生100人を対象に、1泊2日のキャリアアップセミナーでカタリ場を行った。大学生の語りかけに、新たな自分を見つけようという目撃から聞き入る生徒たちの姿に、カタリバとの連携・協働で、教育はさらに充実できるという自信がもてた。雲南市から新たな教育モデルの創造を目指し、学校、地域、行政の良きパートナーとして活躍していきたい。

“カタリバを広める”をデザインからサポート



武田 佑介  
デザイナー / Troposphere.LLC

カタリバを知ったのは、被災地のコラボ・スクールがきっかけでした。私の親戚も被災しており、被災地での生活がどんなに不自由であるかは身近に感じていました。私は、現地に足を運ぶという直接支援はできません。ですがカタリバのWeb制作等をお手伝いすることで、できる事の幅が広がっていくことを感じています。また、カタリバが被災地支援だけでなく、高校生へのキャリア教育支援も展開していることはとても興味深いです。私自身も若い時にこのような場を与えられていたら、より面白い人生になっていたのではないかと思います。これからは業務をサポートするとともに、カタリバの活動を色々な人に勧めたいと思います。

様々な分野で活躍する  
プロフェッショナルな方々に、  
カタリバの活動は支えていただいています。

## さまざまなカタチで、評価いただきました

表彰やマスコミでの紹介など、たくさんの方に活動を知っていただき、評価の機会を頂戴いたしました。その一部をご紹介します。

### 受賞歴

- 2008.12 日経ウーマン・オブ・ザ・イヤー2009 キャリアクリエイティブ部門
- 2009.6 内閣府・男女共同参画「チャレンジ賞」
- 2010.9 2010年度 グッドデザイン賞
- 2012.5 社会貢献支援財団「平成24年度 東日本震災における貢献者表彰」
- 2014.2 朝日のびのび教育賞
- 2014.4 日経ソーシャルイニシアチブ大賞「東北部門賞」
- 2015.3 ICT夢コンテスト「特別賞」
- 2016.12 平成28年度 未来をつくる若者・オブ・ザ・イヤー「内閣総理大臣表彰」



「平成28年度 未来をつくる若者・オブ・ザ・イヤー」表彰式

### 行政との協力

- 2011.4~ 埼玉県が「カタリ場プログラム」を自治体として導入
- 2015.1~ 代表・今村が「中央教育審議会 初等中等教育分科会教育課程部会 教育課程企画 特別部会」に委員として参加(～2016.12)
- 2015.4~ 「東日本大震災からの女川町の教育環境の復興のためのパートナーシップ協定」締結
- 2015.4~ 文京区より委託を受け、中学生専用の施設「文京区青少年プラザ b-lab」の運営開始
- 2015.4~ 神奈川県川崎市、大阪府大東市、福岡県北九州市において、マイプロジェクト推進のためのパートナーシップ連携を結ぶ
- 2015.5~ 代表・今村が「東京オリンピック・パラリンピック競技大会組織委員会 文化・教育委員会」に委員として参加
- 2015.6~ 島根県雲南市教育委員会から不登校支援と社会教育事業を受託
- 2016.4~ 山口県が「カタリ場プログラム」を自治体として導入
- 2016.7~ 足立区から委託を受け、困難な環境で育つ子どもたちを対象とした学びのサポートを行う居場所施設「アダチベース」の運営開始
- 2016.11~ 代表・今村が「内閣官房教育再生実行会議」に委員として参加



島根県雲南市教育委員会と協働し、地域活性化を応援

### メディアでの報道

#### 新聞

- 2015.4.18 読売新聞 「やりたいことができる「居場所」」
- 2015.12.25 読売新聞 「「AO受験」考え抜く大切さ」
- 2016.1.9 朝日新聞 「自信を持てる自分の居場所」
- 2016.2.4 朝日新聞 「人間関係広げ「挑戦」を支える」
- 2016.2.25 毎日新聞 「学び直しの場が必要」
- 2016.2.25 東京新聞 「NPO 活動継続のコツは」
- 2016.6.17 朝日新聞 被災地の子 学び支える
- 2016.10.4 朝日新聞 「いま、地球で起きていること」

#### テレビ

- 2015.10.20 NHK 総合「被災地からの声」
- 2016.2(4回放送) NHK Eテレ「東北発未来塾」
- 2016.3.11 NHK 総合「ひるまえほっと」

#### ラジオ

- 2015.10.9 J-WAVE「JK RADIO TOKYO UNITED」
- 2016.3.9 TBS ラジオ「荻上チキ・Session-22」
- 2016.6.23 J-WAVE「TOKYO MORNING RADIO」
- 2016.9.1 RKK ラジオ「防災 命のラジオ」
- 2016.12.1 FM 熊本「FMK Morning Glory」

#### 雑誌

- 2015.11.24 読売クオーターリー(10月30日発行) ふるさとへ心を動かす「仕掛け」とは何か
- 2015.11.28 考える主権者を目指す情報誌 Voters(10月20日発行) マイプロジェクトに見る高校生の社会参画意識
- 2016.3.9 AERA(3月7日号) 語る場という愛情基地
- 2016.7.29 キャリアガイダンス(7月号) 「自分ごと」に「伴走する人」がいるなかで一人ひとりのリーダーシップが引き出されていく
- 2016.9.15 LEE(10月号)「放課後学校」をつくって支援
- 2016.12.7 PRESIDENT WOMAN(12月号) 挑戦する原動力は何ですか?
- 2016.4~ 月刊「生徒指導」[中学生のリアル × カタリバ]連載
- 2017.3



\*その他にも、多数のメディアにて放映・掲載をいただきました。

## 団体概要

名称 認定 NPO 法人カタリバ (認定特定非営利活動法人カタリバ) 役員 代表理事 今村久美  
 本部 東京都杉並区高円寺南 3-66-3 高円寺 commons 2F 理事 岡本拓也、酒井穰、中原淳、山内幸治  
 TEL 03-5327-5667 FAX : 020-4665-3239 監事 久保田克彦、中山龍太郎  
 設立 2001年11月1日(2006年9月21日に法人格取得) 事務局長 鶴賀康久  
 職員 90名(2017年2月現在)



### 理事・監事 プロフィール



理事  
**岡本 拓也**  
 特定非営利活動法人  
 ソーシャルベンチャー・パートナーズ東京 代表理事  
 Social Venture Partners International 理事  
 ソーシャルマネジメント合同会社 共同創業者  
 KIT 虎ノ門大学院 客員教授  
 公認会計士



理事  
**酒井 穰**  
 株式会社 BOLBOP 代表取締役会長  
 介護メディア KAIGO LAB 編集長  
 介護ビジネス・スクール KAIGO LAB SCHOOL 学長  
 事業構想大学院大学・特任教授(人的資源管理論)



理事  
**中原 淳**  
 東京大学 大学総合教育研究センター 准教授  
 東京大学大学院 学際情報学府(兼任)  
 大阪大学博士(人間科学)



理事  
**山内 幸治**  
 特定非営利活動法人エディック  
 理事/事業統括ディレクター



監事  
**久保田 克彦**  
 公認会計士 税理士



監事  
**中山 龍太郎**  
 弁護士

(敬称略・五十音順)

### 沿革

- 2001.11 今村久美・三箇山優花(当時中澤久美・竹野優花)によって学生中心の任意団体「カタリバ」を設立
- 2004.10 高等学校を対象にした出張授業「カタリ場」を本格展開
- 2006.9 東京都より「特定非営利活動法人」(NPO 法人)取得
- 2007.4 青森県・沖縄県など他地域へカタリ場プログラムのノウハウ提供開始
- 2009.4 多様な学びを提供する校外学習プログラム「カタリバ大学」開講
- 2011.3 東日本大震災発生
- 2011.4 全国の NPO 等へ「カタリ場」プログラムの事業運営ライセンスを提供開始。
- 2011.7 宮城県女川町に被災地の放課後学校コロバ・スクール「女川向学館」オープン
- 2011.12 岩手県大槌町にコロバ・スクール「大槌臨学舎」オープン
- 2013.6 東京都より「認定特定非営利活動法人」(認定 NPO 法人)取得
- 2013.12 「全国高校生マイプロジェクトアワード」開始
- 2015.4 中学生の日常に第三の居場所を。東京都文京区に中学生の秘密基地「b-lab(ビーラボ)」オープン
- 2015.6 教育から地域の魅力化へ。島根県雲南市に「おんせんキャンパス」オープン
- 2016.4 熊本地震発生
- 2016.6 熊本県益城町にコロバ・スクール「ましき夢創塾」オープン
- 2016.7 貧困などの子どもたちの安全基地「アダチベース」オープン

取り組む事業は広がっていますが、  
 私たちは 2001 年より一貫して、  
 思春期の子どものための支えとなる  
 "ナナメの関係"と"本音の対話"  
 の力を信じ、変わる時代の中で、  
 事業を育ててきました。